

茜色の歌姫



第六部 壬申の乱



壬申の乱 (想像模型)

是^{すめらみこと}天皇、高市皇子に謂^{かた}りて曰^{のたま}はく、「其^それ近江朝には、左右大臣、及び智謀^{かしこ}き群臣、共に 議^{はかりごと}を定^なむ。今朕^{われ}、與^{とも}に事を計^{はか}る者無し。唯^{いとけなくわ} 幼^{こども} 少^{すく}き孺子^{にうし}有^あるのみなり。奈^{いか}之何^{かに}かせむ」とのたまふ。皇子、(中略)奏言^{もろ}さく、「近江の群臣、多^{おほ}なりと雖^{いふと}も、何^{なに}ぞ敢^あえて天皇の靈^{みかげ}に逆^{さか}はむや。天皇独^{ひとり}りのみましますと雖^{いふと}も、臣高市、神^{あまつかみ} 祇^{つかみ}の靈^{たま}に頼^より、天皇の命^{いのち}を請^{まか}けて、諸

将を引率て征討たむ」(中略) 天皇誉めて、手を携り背を撫でて(中略) 鞍馬を賜ひて、悉に軍事を授けたまう。

『日本書紀』卷第二十八)

第六章 韓橋の彼岸 672

不破に派した五千の軍が、山部王や蘇我果安の死、そして羽田矢国ら豪族どもの裏切りにより、天野河で降伏した事を知った大友皇子は、次々と東へ向けて兵を派し、要所要所に城を築かせた。小高い丘に楯を並べた陣を築き、降りて戦うのではなく、大海人皇子の軍が近づけば、矢を射かけ、少しでも進軍を遅らせるのである。

その間に、さらに興兵使者を諸処に派し、手荒く民を徴して兵となし、近江に集めさせた。近江に間近な里々では、壮丁を連れ去られる民の叫喚や怨嗟の声に満ちた。

飛鳥に派した軍は、大伴吹負らに敗れ、多くの将兵が捕らわれた。吹負らは難波に軍を進めた。また、高市皇子は降伏した羽田矢国を將軍として三千の兵を割き与え、淡海を北岸沿いに進ませ、自らは七千余の兵で南岸を進み、近江京を挟撃する策をとった。

諸処に築かせた城の抗いもむなしく、大海人皇子の軍は着々と、三方より近江に迫った。近江京の人々は恐惶し、逃散する民や兵が後を絶たなかった。

「瀬田の韓橋に陣を築き、迎え撃つ他はなし」

内裏正殿で開かれた朝議で出た策は、これだけであった。

瀬田川は、近江京より二十里(約10キロメートル)、かつて天智天皇が百済の技人どもに造らせた長さ二町(約200メートル)の韓橋が架かっていた。この橋を越えれば、すでに近江京は

目と鼻の先。すなわち、高市皇子に率いられた兵が韓橋を越えた時、近江の命運は尽きる。

「さらに……」

大官どもは訴えた。

「大友皇子自ら兵を率い、瀬田に赴かれよ」

敗北に次ぐ敗北で、近江方の兵の士気は落ち、軍規は乱れていた。敵軍を率いるのは高市皇子。その名に抗しうる大將軍を立てねば、士気を復することはできない。

大友皇子は諾し、大官どもが退出した後、

「智尊を呼べ」

舍人をして呼ばせたのは、五十がらみ、僧形の百濟人であった。その貌は、吊り上がった眼に、驚のような嘴のある木の面で覆われている。重い癩を患った智尊の貌は、鼻は落ち、頬は爛れていた。

百濟にいた頃より、王に背いた重臣が謀殺された時、その影に智尊の姿がちらつかないことはなかった。大友皇子の信も篤い。

——智尊。

百濟言葉で大友皇子は声を潜めた。

——二日後、私は自ら軍を指揮して、瀬田川へ行く。

智尊は黙して頷いた。さらに大友皇子は声を潜めた。

——私が出陣すれば、兵の士気もあがると皆は言う。そう主張する連中の顔に、すでに士気はない。大海人皇子が勝って、この近江に乗り込んできたとき、責任をすべて私に押しつけ、延命

をはかる気だ。

……。

——……私も、承諾するかわり、中臣金、巨勢比等、紀大人、大官どもすべて出陣させた。内裏に残しては、いつ裏切って、背後から私を攻めないとも限らないから……。分かるか、智尊、そんな状態で、勝てるはずがないじゃないか！

……。

——唯一、勝つ方策があるとすれば、人質にとった倭媛皇后と十市皇女。この二人を軍の全面に立たせ、その上で敵を威嚇するのだ。すぐに軍を解散させ、降伏しなければ、二人を殺すと。それしかない、と私は主張した。

……。

——敵軍を率いるのは高市皇子。彼に、そんな重要なことを決められるはずはない。必ず、不破の大海人皇子に判断を求める。使者がどんなに急いでも、数日はかかるだろう。その間に、策を立てる。奇襲部隊を敵の背後に回らせるか……。だが、大官どもは、中臣も巨勢も反対した。恐れ多くも皇后を敵の矢面に立てる不敬の罪を犯したくない、というわけだ。あるいは、皇后は広く民に崇拝されている、かえって敵の戦意を煽るのではないか、という者もいた。

……。

——大和人は信じられない……。。

大友皇子は苦々しげに言った。

——連中は、皇后や、大海人皇子の娘を戦場に連れていき、危険な目に遭わせた罪に問われる

ことを恐れているのだろう。負けた後の事しか考えていない奴らだからな。だが、私は負けたくない。負けるとも思っていない。勝つために、あの二人を戦場に引きずり出し、敵の目の前にさらしてやる。そこで智尊……。

智尊はわずかに貌を上げた。

——私が出陣した一日後、ひそかに皇后と皇女を連れ出し、私の後を追って欲しい。
……。

——内裏には、お前と、お前の配下の百濟兵だけを残しておく。大和人に見とがめられる心配はない。お前が瀬田に着く頃には、戦端は開かれているだろう。私に挨拶する必要はない。すぐに皇后や皇女を連れて韓橋に行き、敵軍に向かって、軍を解散させねば二人を殺す、と叫べ。

——分かりました。

深く頷き、智尊は初めて口を開いた。

——それで……。

——うむ？

——皇后と一緒に、女孀が十名ばかり幽閉されていますが、あの女たちはどうします？

——殺せ。

大友皇子は、躊躇う気配もなく言った。

——土蜘蛛と呼ばれる女が混じっているかもしれない。独り残らず、口を封じてしまえ。

その二日後の朝。大友皇子は、右大臣中臣金をはじめとする大官どもとともに、ようやく集

めた二千の兵を伴い、内裏を発った。智尊以下二十余の百濟兵のみが残るばかりの内裏は、森閑と静まりかえった。

大友皇子が発った後、空はにわかになくかき曇り、野分の風雨が荒れ狂った。内裏正殿と寝殿の屋根瓦が飛ばされ、柱は揺れ、雨音が激しく壁や屋根を叩いた。内裏寝殿の裡に押し込められた女どもは、音のやかましさと、壁や柱の揺れに怯えた。

その翌日。野分はやみ、空は一転して晴れ上がった。

不意に、荒らかに足音が響き、扉の外で何やら騒がしく声が交わされた。

何事……？

朝餉の粥を口に運んでいた女どもは身を竦ませた。

……いよいよか。

額田郎女は悟った。高市皇子の軍が、近江に迫りつつある。大友皇子が、吾等をただ、残していったはずはない。必ず何か仕掛けてくるはず……。

十市皇女が、郎女の隣に坐し、身を寄せてきた。唇が細かく震えていた。郎女は、いまだ布に覆われた貌の、わずかに晒された唇に笑みを浮かべ、頷いてみせた。

倭媛皇后は、常と同じく、静かに木の匙で碗の米を掬っている。

扉が開いた。

入ってきたのは、黒々しい甲冑に身を固め、伎楽の面をつけた僧形の智尊。さらに二人の百濟兵であった。彼等の背後、寝屋の外には二十人ばかりの兵の群が控えている。

「倭媛皇后」

智尊は、膝を突いて拝礼し、告げた。

「十市皇女と共に出でましたまえ」

「いづくに……」

倭媛皇后は問うた。

「遷るのか？」

「共に、出でましたまえ」

同じ言をたどたどしく繰り返す異形の百済僧を、倭媛皇后はしばし見つめ、やがて「諾」と頷き、十市皇女に目を遣った。皇女の右手はいつしか額田郎女の袖を掴み、強く握りしめていた。

額田郎女は、静かな面差しを保つ倭媛皇后を見やった。皇后は眼で頷いた。郎女は、そつと十市皇女の手甲に己が掌を乗せ、「出でませ」と囁いた。十市皇女は、怯える面差しで郎女を見つめた。瞳が悲しげに揺れていた。やがて俯き、唇を噛みしめ、小さく頷いた。

十市皇女と倭媛皇后は立ち上がった。智尊は、皇后と皇女の前後を二人の百済兵に護らせて寢屋を出、残る兵どもに何か目配せして去った。

たちまち、残る二十人の百済兵が寢屋に雪崩れ込んだ。抜きはなつた剣が薄暗い寢屋の裡で光った。女婦どもは悲鳴をあげ、室の一隅に固まった。ただ一人、白布で貌を覆った額田郎女の軀が跳躍した。

一人の百済兵が呻いて身を折り、うずくまった。両手で股間を押さえ、剣を床に取り落とした。その剣を額田郎女はすばやく拾い上げ、一閃させた。

三人の百済兵が悲鳴をあげ、両手で切り裂かれた貌を覆って倒れ、床を転げ回った。

不意の逆襲に立ちすくむ百済兵どもの背後に、天井の梁より、四つの影が降り立った。土蜘蛛の繭環、葉耶、結奈、瀬莉だった。

まさに寢殿の門をくぐり出ようとした智尊は、背後で起こった喧噪に足を止めた。重なって響き渡る悲鳴は、女のものではなかった。

……どういふことだ。

智尊は、皇后と皇女の前後を護る百済兵の一人に、眼で合図した。百済兵は頷き、皇后の寢屋へと駆け去った。

「おそらく……」

去った兵を目で追う智尊の背後で、倭媛皇后が呟いた。

「汝の兵は、悉く土蜘蛛どもに……」

さらなる悲鳴が響いた。寢屋へと去った兵の声であった。

智尊は、振り返って皇后を見た。皇后の悲しげな微笑みは、あたかも勝ち誇つたもののように、智尊の眼に映った。腰の剣の束に手がかかった。逆上したのではない。やがて来るであろう土蜘蛛どもから逃れるには、皇后らを楯にするしかない。

その時、一人残っていた百済兵が呻いて腰を折った。その股間に、十市皇女の膝が食い込んでいた。百済兵は倒れ、皇女は身を低くして智尊に飛びかかった。

皇女の頭を鳩尾に打ち込まれ、智尊は呻いた。その腰に、皇女はしがみつき、智尊は仰向けに倒れた。

土蜘蛛どもに蹴られたふぐりを抑えて呻く者、額田郎女に切り裂かれた貌を双の手で覆う者、百済兵はことごとく床に悶えて倒れ、その嗚咽と号泣が皇后の寢屋に満ちていた。

「疾う！」

怯えて身を寄せ合う女孺どもを、額田郎女は促した。

「立て！ 行くぞ！」

土蜘蛛どもに手を引かれるように、十人の女孺どもは駆けた。駆けて、寢殿の門に至ると、立ちつくす倭媛皇后の足許に、十市皇女が智尊に覆い被さって倒れていた。

智尊の貌を覆う面の縁から血が溢れ出ていた。皇女は、智尊の腰にしがみつき、右手で股間を握りしめていた。その指の隙間からも血が溢れ、智尊の袴を赤く染めていた。

「皇女よ！」

郎女の叫びに、皇女はやつと貌を上げた。頬を青ざめさせ、眼が怯えたように見開かれ、睫が、唇が細かく震えていた。

「母が……」

かすれた声が、皇女の喉から振り絞られた。

「母が……かつて、そうしたように……吾も……」

倭媛皇后が眼を背けた。智尊の傍らに、股間を両手で押さえ、横たおしに倒れて呻く百済兵もいた。皇女は、兵のふぐりを蹴り上げた後、智尊を押し倒し、同じくふぐりを握り砕いたのだ。

「皇女よ」

額田郎女は膝をついて皇女の肩を抱き、びくりとも動かぬ智尊の軀から引き離れた。

「案じたもうな……皇女はただ、皇后を護り奉り、なすべきことを、なしたまで」

そう囁く郎女に、皇女の眼から涙が滴り落ちた。郎女の肩に頭をもたせかけ、左右の手で貌を覆い、啜り泣いた。

十市皇女の背を撫でさすりつつ、額田郎女は繭環に言った。

「汝は蘇我安麻呂の邸に赴き、葛野皇子を護れ。葉耶は、女孺どもを連れ、近江を出でよ」

「諾」

繭環と葉耶は頷いた。郎女は、残る二人を見やり、言った。

「結奈と瀬莉は、吾とともに来よ」

「ともに……いづくへ？」

眼を輝かせて問う瀬莉に、郎女は微笑んだ。

「戦場へ」

翌日。

高市皇子に率いられた一万の軍が、瀬田川の東岸に姿を現した。

二日前の野分のため、川の流れば茶色く濁り、激しい波飛沫をあげつつ、轟々と流れていた。

西岸には、すでに布陣を終えた大友皇子の軍二千が待ちかまえている。

「いよいよだな……」

河岸に馬を進めた高市皇子に随伴した舎人の村国男依は呻くように言った。隣で朴本大國が

深く頷いた。

「吉野宮を出でて、伊賀の山中を越えてより、一月か……長かった軍がやっと終わる」

「大海人皇子とともに、伊勢を発つてより、すでに二十余年だ」

あまべのおおいわ
海部大石も和した。

「かような日が来るとは、思ってもみなかった」

「この川幅では……、矢を放つても届くまい」

感慨深げな舎人どもとは異なり、高市皇子はあくまでも冷徹であった。

対岸までは、約二町（約200メートル）。彼我の間には、激しい濁流。水かさが増し、兩岸を結ぶ唯一の通路である韓橋の橋板の真下、三尺（約1メートル）たらずにまで迫り、今にも橋を呑み込みそうであった。

「舟も使えまい。となれば、やはり橋を渡るしかない」

そう言う男依に、朴本大国が首を傾げた。

「しかし、何故、橋を落とさないのだ」

川の向こう岸から攻め来る敵を防ぐ時、橋を落とすか、あるいは、橋板を外して通せなくするのが、軍の常道である。しかも韓橋は、幅五歩（約8メートル）。一度に大軍を渡すことができる。

「あの韓橋は、先の天皇が、百済人の技人に架けさせた橋」

海部大石が言った。即ち、百済の皇子であった豊璋が、大和を統べることの正しさを誇示するための橋であった。これほどの巨大な橋は、この時代、いづくにもなかった。

「それ故、たやすく毀つことはできぬのである」

「まずは、吾等より仕掛けよう」

高市皇子は断を下した。

「犬養五十君と谷塩手を先鋒として、橋を渡って敵陣を攻めさせよ」

犬養五十君と谷塩手は、もともとは近江方に属し、戦わずして降伏した者どもである。それだけに功勳を樹てようと気を逸らせていた。先鋒には相応しい。

だが、長く軍旅を共にしてきた舎人どもには、高市皇子の意が別にあることに気づいていた。

抗いもせず、たやすく寝返った二人に、高市皇子は信を措いていない。たとえ、敵が畏を張って待ちかまえていたとしても、皇子にとっては、失って惜しくない二人であったのだ。

高らかに鉦鼓の音が響き、犬養五十君と谷塩手に率いられた五百の兵が、呐喊の声を張り上げ、右手に矛、左手に楯を構え、韓橋を渡り始めた。

幅五歩（約8メートル）の橋上に、七人の兵が並び、その後方に同じく七人ずつ七十余列、橋板を喧しく踏みならし、駆けた。

大友皇子の軍は、楯を並べ、矢を射るでもなく、兵を繰り出すでもなく、静まりかえっている。功勳に逸る犬養五十君や谷塩手は、それをいぶかることもなく、ひたすら声を励まし、駆けた。最前列の兵は、たちまち橋の中ばに達した。



瀬田の唐橋(滋賀県大津市)

そのとき。

悲鳴が沸き起こった。真つ先に駆けていた兵十数の姿が不意に消えた。それに続く兵どもは、目の前の橋板が消え、轟々と流れる瀬田川の流れを、足のすぐ下に見た。踏みとどまろうとしたが、後ろの兵どもに押され、叫喚しつつ川に落ちた。

橋の半ばにぼつかりと穴が開いた。そこにあつたはずの橋板は、三步（約5メートル）先にあつた。ずれた橋板の先に三本の綱がつけられ、対岸へと伸びていた。大友皇子の軍は、韓橋に着くなり、橋板の一部を外し、綱で引いて外せるようにしてあつた。策は当たった。後ろの兵に押され、百を超える兵が川に落ち、濁流に呑まれた。

さらに対岸から雨のように矢が降り注いだ。踵を返して戻ろうとする兵と、何が起こったのか分からぬまま前に進むとうとする兵どもがもみ合い、動けぬままに矢を浴び、次々と倒れた。押されて橋桁より川に落ちる者も少なくなく、逃げ帰れた兵は二百余にすぎなかった。犬養五十君や谷塩手の姿もなかった。

大友皇子の陣から十数の兵が駆け出し、外した橋板を元に戻した。続いて、馬に乗った大友皇子が、兵どもに護られ、橋の上に姿を現した。

「見たか、謀叛人ども！」
皇子は高らかに叫んだ。

「攻めるならば攻めよ。仕掛けはこれのみにあらず。橋を渡ろうとすれば生きては還れぬ。命が惜しくなれば、いざ、攻め来たれ！」

大友皇子の軍に五倍する、高市皇子の陣営にざわめきが走った。瞬く間に三百の兵が、瀬田川の流れに呑まれて運び去られ、あるいは血みどろの屍となつて橋の上に積み重なり、あるいは総身に矢を浴びつつうめき転がるのを見て、あまりにもたやすく勝ちをおさめつづけた軍人の将兵は、たやすく戦意を喪つた。

大將軍の高市皇子は、唇を噛みしめた。失つて惜しくはない犬養五十君と谷塩手ではあつたが、あまりにも多くの兵を死なせたことで、これまで負けを知らぬまま進んできた将や兵どもが、気を萎えさせつつある。すぐに手を打たねばならない。だが咄嗟に策は浮かばず、左右を見回せば、村国男依も海部石床も朴本大國も、眼を見張つて黙すのみであつた。

「如何する」

努めて面差しを冷ややかに保ちつつ、高市皇子は問うた。

「橋板を外されても……」

朴本大國が口を開いた。

「橋桁をつたえば、渡れぬでもあるまい」

「矢を射掛けられて、如何する」

「甲冑を二重に着込めば、矢は防げる。少数の兵でも、対岸にたどり着き、橋板を引く縄さえ切れば、全軍を押し出せる」

「ならば……」

高市皇子は言った。

「左様にせよ」

甲冑を重ね着し、貌を面で覆った百の兵が選ばれ、再び橋を駆けた。降り注ぐ矢は、重ね着した甲冑が弾いた。甲冑の隙間を射られ、川に落ちる兵も少なくなかった。それでも幾十の兵が橋の半ばに達した。

またも橋板が縄で引かれ、外された。兵どもは、橋の欄干にしがみつき、細い橋桁を踏みしめつつ、対岸に向かった。橋に開けられた穴を通り過ぎ、欄干から手を離し、橋板を踏んで駆けた。

と、その先の橋板にもまた、縄が付けられていた。勢いよく引かれ、新たな穴が開いた。兵どもは悲鳴を上げ、悉く川波に吞まれていった。

「見たか！」

大友皇子は叫んだ。

「年若な高市皇子め、打つ手もなく、怖じけたと見える！」

高市皇子の周りに、多くの将が駆け寄り、口々にわめいていた。高市皇子は、青ざめた面持ちで腕組みしたまま黙している。

「されど……」

傍らの巨勢比等がおずおずと口を開いた。

「敵は吾等が五倍、やがて川の流れが静まれば、船や筏を浮かべて押し寄せてくる。その折りは如何すべきや」

「大上川より逃げ還った將軍よ、またも臆するか！」

大友皇子は嘲り笑った。

「心安んじよ、吾が策はこれのみにあらず」

「他にも策が？」

中臣金が、息を弾ませた。

「如何なる策なりや」

「やがて、来る」

「来る、とは？」

貌を見合わせて問う巨勢比等と中臣金に、大友皇子は哄笑し、歩き出した。陣中に立てられた高樓の階梯に手をかけて昇った。

高樓に上がった大友皇子は、陣の背後に眼を凝らし、やがて叫んだ。

「来たぞ、吾が策が！」

近江京の方より、馬が三騎、陣に駆け寄ってきた。いずれも黒い甲冑に身を包み、貌を面で覆っている。うち二頭には、後ろ手に縄を打たれた女が一人ずつ、兵と馬首に挟まれて鞍の上で揺れていた。

「智尊である！」

大友皇子は高樓の上から、後方に築かれた柵を護る兵どもに向かって叫んだ。

「疾う、通せ！」

階梯を滑り落ちるように降り、惚けたような面差しの巨勢比等、中臣金を尻目に、大友皇子は馬に乗り、橋に向かって駆けた。

「高市皇子よ、聞け！」

再び橋板をはめた韓橋の半ばまで馬を寄せ、大音声で呼ばわった。

「汝は忘れたか！ 吾が方には、汝が姉なる十市皇女と、倭媛皇后が質としてある！」
勝ち誇った馬上の大友皇子の眼に、高市皇子の陣がざわめくのが見えた。

「皇后と、十市皇女は吾が陣にある！ 汝等が再び攻め来れば、皇后といえども害し奉る。如何するぞ、高市皇子よ！」

それを聞き、巨勢比等と中臣金は眼を見張った。皇后と皇女は内裏にあるはず。敵の矢面に立たせるのは不敬であり、民の信を失うことになりかねない。皇后と皇女を軍旅に伴うと言い張った大友皇子も、群臣の諫めに思いとどまらなかったはず。それが何故、この陣中に。

いぶかしがる二人の背後に馬蹄が響いた。見れば、黒い甲冑の兵が三騎、縛られた倭媛皇后と十市皇女を乗せて駆けてきた。

「よくぞ来たり、智尊！」

橋から駆け戻った大友皇子は、羽根飾りのある兜と、鷲のような嘴のある木の面で頭と貌を覆った馬上の兵に向かって叫んだ。

「拝礼は不要、すぐさま、皇后と皇女を連れ、橋の半ばまで行き、逆賊どもに見せよ！」

三人の騎兵はうなずき、橋に向かって駆け始めた。

「皇后と十市皇女を……何故に……」

唇を震わせつつ、巨勢比等は大友皇子に詰め寄った。

「豪族や民に崇められる皇后を、敵前に随れ奉るか！ 民の信望を失うのみ。かの者ども、引き返させたまえ！」

「煩、わしき諫言かな」

大友皇子は、笑みを消さずに一喝した。

「まずは軍に勝たねばならぬ。そもそも、汝や蘇我果安が犬上川で敵を破っていれば、かような策は用いなかった！」

黙した巨勢比等を嘲るように一瞥し、大友皇子は眼差しを橋へと移した。対岸の高市皇子の陣はいよいよ騒がしく、その狼狽ぶりは露わに明らかであった。

「如何される！」

村国男依が、高市皇子の腕を掴まんばかりに、詰め寄った。

鷲のような面をつけた騎兵がまず、ゆつくりと橋に馬を進め、皇后と十市皇女を乗せた二騎がその後に随った。

海部石床、朴本大國ら舎人ども、さらに周囲の将も兵も、固唾を吞んで皇子を見守っている。如何すべきか……。高市皇子は忙しく考えを巡らせた。大友皇子は、皇后や十市皇女を害する、と言った。二人が弑殺されれば、たとえ軍に勝っても、責めは免れまい。ならば、不破にある大海人皇子に駅馬を飛ばし、策を仰ぐか。駅馬が戻ってくる間に、敵は如何なる策を講じるだろうか……。

しかし、今はそれしかない。

「男依よ」

高市皇子は声を絞り出した。

「まず、不破に使を發し、大海人皇子に報せよ。父なる皇子より命が届くまでは、守りを堅くし、動くな！」

「諾」

男依が、傍らの兵長に命じた。数騎の兵が、高市皇子の命を陣中に伝えるべく駈け出した。そのとき。

「皇子よ！」

遠眼のきく朴本大國が叫んだ。

「あれを……」

黒い甲冑を着けた三騎が橋の半ばに達したとき、その後ろに随っていた二騎の兵が、馬を下り、踵を返した。橋のたもとに控える、橋板の繩を引く兵に駆け寄り、不意にその股間を蹴った。

たちまち、繩を引く十数の兵どもは、ことごとく蹴られたふぐりを押さえて倒れた。二人の騎兵は、劍を抜き、橋板の繩を切った。

——智尊！

大友皇子が百濟言葉で叫んだ。

——何をする！ 貴様、狂ったか！

橋の半ばに達して佇んでいた騎兵は、兜を脱いだ。頭の後ろに結んだ髪が、風に吹かれて揺れた。つづいて驚のような面を投げ捨てた。面が外されたその貌は、眼と口のみ露わに、白布に覆われていた。

「吾は、額田郎女！」

發せられた声は、女のものだった。

「皇后と十市皇女を、高市皇子のもとへ、運び奉る！」

再び馬に乗った二騎も兜を脱いだ。土蜘蛛の結奈と瀬莉が、汗にまみれて紅潮した面差しを現した。

橋板を鳴らし、額田郎女と、皇后、十市皇女を乗せた二人の土蜘蛛の馬は、対岸に向かって駈けた。結んだ髪を靡かせつつ、一散に駈けた。

高市皇子の陣から歓声が沸き起こった。

「土蜘蛛だ！」

巨勢比等が叫んだ。

「大友皇子よ……皇子は誤りたもうた。飛鳥、犬上川、軍はすべて、土蜘蛛のために敗れた。土蜘蛛を蔑るにせず、吾等が味方にしておれば……！」

「黙れ！」

大友皇子は、鞭を振るって巨勢比等を打ち据えた。頬を鞭で破られた比等は、貌を覆ってうずくまった。

「弓兵！ 射よ！ 皇后、皇女を殺め奉っても構わぬ！」

「今を逃すな！」

高市皇子は叫んだ。

「軍衆よ、橋を渡れ！」

橋を渡り終えた三騎と入れ違いに、おびただしい兵どもが、橋に向かって殺到した。右手に矛を構え、左手に楯をかざして矢を避けつつ、おめき叫びながら、対岸の陣へと雪崩れ込んだ。

将兵の歓呼に包まれ、陣中に駆け入った三騎の女どもを、高市皇子や村国男依ら舎人どもが出迎えた。

「皇后よ、久しく」

高市皇子は膝を突いて拝礼した。

「よくぞ、近江の内裏を抜け、この瀬田に至りたもうたことかな」

「高市皇子よ、まず拝礼すべきは、額田郎女である」

馬上の倭媛皇后は、息を弾ませ土蜘蛛の結奈の背にしがみつたまま、白布で貌を覆った額田郎女を指した。

「郎女と土蜘蛛どもがいなければ、吾等は未だ大友皇子の質として、汝等の軍の妨げとなつたはず」

高市皇子をはじめ、将兵の眼差しが額田郎女に注がれた。

「厚く謝し奉る」

高市皇子は、額田郎女の馬に歩み寄り、拝礼した。貌を上げ、郎女の貌に巻かれた白布を訝げに見つめた。

「異母兄なる皇子よ」

十市皇女が口を開いた。

「母なる額田郎女は、常に吾が側にあつた。故に、辛い押し込めの日々を耐えられた」

常に……？ 高市皇子は、額田郎女は、内裏の外で、土蜘蛛どもを差配していると聞かされていた。常に十市皇女の側に？ すなわち、内裏にあつたのか？ 内裏には、郎女を知るものは多はず。かつて土蜘蛛であつた郎女を、生かしておくだろうか……。

高市皇子は、悟つた。何故に額田郎女の貌に、白布が巻かれているのかを。

高市皇子は再び膝を突き、郎女に向かって拝礼した。

「ふたたび謝し奉る」

常には伶俐な高市皇子の眼の縁に、涙が浮かんでいた。

「よくぞ……」

声音が乱れ、その先に言うべき言葉が見つからなかった。十市皇女の眼も、倭媛皇后の眼も、土蜘蛛の結奈や瀬莉の眼も、潤んで震えていた。

額田郎女は、わずかに露わな唇に笑みを浮かべ、貌を背けた。高市皇子は立ち上がり、皇后に向かつて言った。

「まずは、吾が幕舎にて休みたまえ。軍旅の最中なれど、湯や粥など、奉る」

「如何するぞ、額田郎女」

皇后は、柔らかに笑みつつ、額田郎女に眼差しを向けた。郎女は初めて口を開いた。

「長く内裏に押し込められ、近江京より馬に揺られ、疲れたもう皇后よ。高市皇子の言に随いたまうべし」

「否」

皇后は言った。

「郎女よ、汝は、この陣にて休むより、疾う不破へと駆けたいのではないか？」

「恋うる人に会いにか？」

口を挟んだ土蜘蛛の瀬莉に、皇后は破貌した。

「瀬莉……であつたな、汝は慧い」

「吾も……」

瀬莉は、高市皇子を一瞥し、悲しげに小首をかしげ、笑った。

「人を恋うて、拒まれた故……いろいろと悟った」

将兵の眼差しが、高市皇子に注がれた。村国男依は、俯いて笑みをかみ殺した。

狼狽える高市皇子に、皇后は言った。

「土蜘蛛の乙女を拒むとは……胆の太い皇子なるかな」

軽やかな皇后の笑い声に、土蜘蛛の結奈もくすくすと喉を鳴らし、十市皇女も明るい眼差しを額田郎女に向けた。

白布で覆われた面差しは何えなかつたが、額田郎女は、うつむき、黙したままだった。

「土蜘蛛どもよ」

倭媛皇后は言った。

「疾う、駆けよ」

「不破へ！」

結奈と瀬莉は声を合わせて叫び、馬の腹を足で叩いて駆け出した。

額田郎女は、馬上で高市皇子に拝礼し、続いた。

見送る高市皇子の背後で、兵どもが続々と橋を渡り、対岸の敵陣に攻め入った。大友皇子の軍の兵どもは、次々と血飛沫をあげて倒れた。退くな！ と叫ぶ大友皇子の声だけが、血に飢えた獣のように殺戮を続ける兵どもの喚きと、逃げまどう兵どもの悲鳴に、むなしく包まれ消えた。

報せはまっさきに、淡海より難波に注ぐ川舟に乗って、二千の水軍を率いて動かない阿倍比羅夫に伝えられた。

「鏡郎女よ」

傍らに座す、左右の腕を切り落とされた、かつての土蜘蛛の長に、比羅夫は言った。

「大海人皇子は、勝った」

鏡郎女は、背をまっすぐに伸ばし、臉を重たげに垂らし、うつろな眼差しを中空に向けて黙していた。

「嬉しくないのか？」

「吾が事、すべて終わった」

いぶかしげな比羅夫の問いに、鏡郎女は寂しげに笑った。

「もはや、なすべき事は何もない。見るべきほどの事も見た」

「大海人皇子の統^すべる世を、見たくはないのか？」

「この腕を」

鏡郎女は、切り株のように切断された腕を、袖から露わにした。

「かつての配下……安見娘^{やすみこ}に断たれてより、吾が命は、吾が乱した世を平らかに治める償いのためであった」

阿倍の大將軍よ、よくぞ汝が兵を動かさなかつた。日本^{ひもと}でもっとも強い水軍が動かなかつた故に、大海人皇子は勝ち、世の乱れは治まる。深く謝する……。

「吾もまた……」

比羅夫は、白く染まり、わずかに黒さを残す髭^{ひげ}を撫でつつ言った。

「汝と同じく……」

後の言葉は、口を嚙^くんで飲み込まれた。